

私は店長を連れて自分のマンションに入る。一階のオートロックを開け、二階に上がり自分の部屋のドアに鍵をさして開けた。

「本当に良いのかい？」

「どうぞどうぞ」

彼は少しためらっているようだったが、私は靴を脱いで先に入った。彼も入って来たので、ワンルームの部屋に招き入れる。

「えーっと、唯花ちゃん。俺が男だって、分かって連れて来てるのかな？」

「はい。分かってます」

「女の子の部屋に、男の人を入れるっていうこと？」

「……」

考えてなかった。男の人と付き合った事も無いので、こう言う事は初めてだし、よくよく考えれば男の人を部屋に入れるのはマズかった？  
でも大人の男の人を部屋に連れて来て、やっぱり帰ってくださいますというのは失礼過ぎる。

「えっと、座ってください！ 紅茶を入れます！」

私は、台所に行ってお湯を沸かし始める。

…わたし何してんの？ やばいやばいやばいやばい！ 何も考えずに大人の男の人を部屋に呼んじゃった！ てか、そうだよ？ そう言う事だよ！ 大人の男の人を部屋に入れるって、やっぱりそう言う事だよ！ どうしよう！

頭がぐるぐると回る。けど何も思いつかない。

そして私はお茶セットを持って部屋に戻り、ティーパックを入れたマグカップを二つ用意する。それにお湯を注いだところで、部屋に沈黙が下りた。すると店長は私の顔をじっと見て言う。

「しかし唯花ちゃんは、非の打ち所がないね。そんなに整ってる顔で生きてるって、どんな感じか想像もつかない」

褒められたことが普通に嬉しかった。でもなんて言って良いか分からない。考えた末に答える。

「店長さんも凄くかっこいいです。モテるって聞きました」

「誰が言った？ そんな事。モテた記憶はないな」

うそ。だってこんなにカッコいいのに？

「あの。鏡見た事あります？」

「プッ！ 一本取られたな」

「ふふふ」

すると店長はスッと私に近づいて来た。

わっ！ わっ！ どうしよう！ どうしよう！

パニクる。

店長の顔が近づいて来て、私の唇に唇を重ねて来た。

ちゅぷ。

…初キス。

何の前触れもなく来るんだ。でも…どうしたらいいか全く分からない。

「緊張してる？」

「はい」

「こういうこと、しょっちゅうしてるの？」

えっ？ ええ？ そういうふうに思われてるんだ？

「えっと、初めてです。女友達しか入れた事ないので」

「嘘だあ。そんな可愛かったらモテるでしょ。マジで」

「あの…本当です」

「まあ、信じてあげる」

多分信じてない。本当にどうしたらいいか分からないのに。

店長はまた私にキスをして来た。私はされるがまま、店長に身をゆだねるしかなかった。すると店長の舌が、ちろちろと私の唇を撫でる。えっと、同じことすればいいのかな？

そして私が舌を出すと、店長の舌が私の口の中に入ってくる。

あ…ディープキス。私…初めてのキスなのに。

でもお任せするしかない、ただ私は口を開けて店長の舌を受け入れる。

「ふふっ。緊張してるのかな」

「してます」

「力ぬいていいよ」

そしてまたキス。こんなカッコイイ大人の人から、抱きしめられてキスをされるのが、こんなにドキドキするなんて知らなかった。自分の部屋に男の人を入れたのも初めてなのに、もうこんな事をしている自分がいる。大学にも男子はいるけど、こんな包容力は感じた事がない。

鼓動の高鳴りが凄すぎて、店長に聞かれるんじゃないかと思ってしまう。

「あの、ドキドキします」

素直に言った。すると店長は微笑んで答える。

「可愛いな。もっと唯花を知りたくなってきた」

「はい」

どうということなんだろう？ お付き合いをするっていう意味かな？

店長はキスをしながら、私のお尻に手を当てて擦った。

あ。そうか……そういうことか。

優しくなでる店長の手が、何をするのかを伝えて来た。店長はそのままカーペットの上に、私を押し倒した。

ドキドキが…。

半分パニックみたいになりながらも、店長を下から見上げる。すると店長が言った。

「綺麗すぎてヤバイ。唯花ちゃん本当に綺麗だね」

「嬉しいです」

また唇を重ねられる。そして店長は私の胸を服の上からまさぐった。どうしていいか分からず、私は店長に身をゆだねるしかなかった。

「脱がせるよ？」

そう言われて頷くしかできない。店長は私をグイッと起こした。

ホワイトのシャツワンピースの上に着ているVネックのベストを脱がせ、そしてシャツワンピースのボタンを一つずつ外し始めた。上半身までのボタンを外すと、インナーのタンクトップが露わになる。でも服屋さんだけあって、お洋服の扱いがうまい。

それを見て店長が言った。

「細いのに意外に胸はあるんだね」

「そう…ですか？」

「体のパーツが華奢だからそう見えなかった」

「はい……」

タンクトップの胸元に口をつけられ、凄く恥ずかしくなってきた。店長は私の上半身を起こしたまま、シャツワンピースの袖を抜く。さらにタンクトップの裾を掴んで、するりと脱がせた。

「可愛いブラ」

私がつけているブラは綿製で、正直子供っぽいと思う。だけど店長は可愛いと言ってくれる。

ブラジャーの上から胸に手を当てられた。

「やっぱ大きい」

恥ずかしい。鼓動が激しくて爆発しそう。

でも……どうしよう。したことないのに。

そう思っていると言葉が出ない。何をしてもいいか分からないでいると、店長が背中に手を回してブラを外した。ハラリと落ちるブラをどうしていいか分からず、とにかく恥ずかしさのあまり胸を隠した。

「手を貸して」

胸を押さえている手をするりとよけられて、店長が私の乳房を直に触って来た。

びくっ。

思わず体をガチガチに硬くしてしまう。

「あの」

私が言おうとすると、店長の方から何かに気づいて言ってきた。

「ん？ ごめん…勘違いしてたら申し訳ないけど、もしかして唯花ちゃん初めて？」

「……あの。はい」

店長が固まる。少しの沈黙が続いているが、彼は少し焦っているみたい。

「部屋には、女友達しか入れた事無いって言ってたね。もしかして唯花ちゃんって……」

もう正直に言うしかなかった。

「あの……彼氏が居た事ないです」

「……」

びっくりしている。そして店長が言った。

「ごめん。てっきり嘘だと思ってた、こう言う事を何度もしたことあるのかと」

「ない…です」

店長が大きくため息をつく。

「俺とした事が…。ごめんね」

そう言つて腰から落ちたブラウスワンピースを引っ張り上げて、私の体にパサリとかけた。

えっ？ どういうこと？

「あの…」

「ゴメン知らなかったから」

そして店長が私からスッと離れる。

どうしよう…。怒らせちゃったんだろうか。

自分でも良く分からない。そしてなぜかポロポロと涙が出て来る。

「うわーごめんごめん！ 怖かったよね！」

だと私は首をふる。だって店長が怖い訳じゃないから。



「違います」

「違う？」

「本当は店長の事が、良いなって思ってたのに失望させちゃったんだって、悲しくなっちゃって」

「俺の事が好きなの？」

「はい」

「そっか、なんかいろいろすつ飛ばしてごめん」

「いえ。だから、全く意識しないで部屋に連れてきたわけでも無くて、このまま帰したくないって思って、私よくわからなくてとりとめない話をしてしまう。だけど店長はスツと肩に手を回して来た。

「仕切り直そう。俺、いま彼女いないし、唯花ちゃんが良かったら付き合わないかい？」

「えっ！ いいんですか！」

「いいもなにも、こつちが聞きたいけどね。君みたいに若い子が、年上の俺でいいのかなって」

「あの…好きなんです」

「じゃあ、普通に付き合ってから……」

いやだ。何故か私は、彼にここに居てもらいたかった。

「続きを…続きをお願いします。帰らないで下さい」

「……」

「帰らないで」

しばらく考えた店長が、意を決したような表情で言う。

「怖くなったら言って。やめるから」

「はい」

店長は私にキスをして来た。

再びブラウスを降ろし、乳房を露わにしてゆつくりと揉んでくれる。

「ん…」

くすぐったいような心地いいような変な感覚。

店長の唇が首筋に落ちて、唇と舌が私の首と鎖骨のあたりを這いまわる。私はただドキドキして、店長にしがみついた。その唇がゆつくりと乳房の方に降りて行き、乳首が口に含まれた。

びくっ。

くすぐつたい。乳首が舐められるたびに肌が栗立つ。

だけど店長は優しく背中に手を回して、私の緊張をほぐすかのように擦ってくれた。  
ちゅぷ。

唇を外して言う。

「初めてだから、怖いと思うけど時間をかけてあげるから」

「はい…」

それから店長は、ゆっくりと私の上半身を舐めていった。

びくっびくびく。

さつきから鳥肌が立ちっぱなし。

これは…気持ちいいっていうんだろうか？

初めての事なので自分でも良く分からない。だけどなんだかうれしかった。